

“9月一斉行動へ”全国実行委で討論

7月21日(水)夜、「裁判員制度はいらない!大運動」の全国実行委員会が弁護士会館で開かれ、秋の運動方針を討議した。

大林検事総長の「今年の夏以降は複雑、困難な事件が多数控えている。まさに正念場で、各地検は火事場に近い状態になる」(6月17日の記者会見)という就任発言は、推進側がほとんどギブアップしている状況を示している。

また、雑誌『世界』(岩波書店)で推進派の四宮啓弁護士が「裁判員経験者が社会のことを考えるようになっている。だから、この仕組みは司法制度であると同時に、社会制度でもあるし、政治制度でもある」と述べ、裁判員制度が「国のかたち」を変えるためであることを居直り始めている。

高山弁護士は「裁判員制度が破滅的状況であるにもかかわらず、なんとして

も権力がやろうとしている理由、時代を明らかにして、権力支配の手先にならないためにとどめを刺す闘いをやろう」と提起した。

この好機をとらえて9月一斉行動へ。集会、学習会、街頭宣伝を拡大しよう。『全国情報』を活用し、裁判員裁判への宣伝戦を強化しよう。創意工夫して行動しよう、と議論した。東京では10月20日に講演集会を行う。講演:池田浩士さん「裁判員制度を考える ファシズムと市民参加」、高橋伴明監督のビデオメッセージ他。

裁判員制度にとどめを! 全国一斉行動・仙台

7月3日土曜日、仙台弁護士会館にて、「裁判員制度にとどめを! 全国一斉行動・仙台」を行いました。死刑廃止連絡会・みやぎ、とめよう戦争への道! 百万人署名運動宮城県連絡会、裁判員制度に反対する在仙弁護士の会の共催で、集会後デモもやりました。当日は、仙台弁護士会主催の司法修習生の給費制問題の集会があり、裁判員制度推進の宇都宮日弁連会長が来るという真っ向からの対立軸の中、約70名の参加があり、裁判員制度つぶそう!の決意を参加者全員で確認しました。

まず最初に、5.18全国集会と裁判員を経験した方のインタビューのビデオ上映がありました。このインタビューでは、裁判所がどこにあるかも知らなかった一般の方が、裁判員を経験して、本当に嫌な制度だ、間違った制度だとお話されていて、この制度の本質を見たように思いました。

スキッとする高山弁護士の話

高山俊吉弁護士はつぎのようなことを話されました。「裁判員制度が始まって一年が過ぎ、2000件中、判決は600件しか出ていない。裁判員裁判は全部お膳立てしてあり、セレモニーのようなもので、その分、公判前手続きが長くなる。また、裁判員体験者からPTSDなどのクレームも出ている。そして何ととっても、出頭拒否が相次いで、



12万人もが、出たくないといわざわざ返事を出している。そのうち2万何千人が重い病気やケガを理由にしている。笑えます。6月17日、検事総長は記者会見で「今が正念場。火事場に近い。人の応援を得て進めていく」と話したそうだが、火事場は止まらない。(笑)

また、よくアメリカの陪審員制度に例

えられるが、根本が違う。陪審員制度の根っこには「国家権力に対する抵抗権」があるが裁判員制度はその反対。裁判員制度は市民参加と言われているが強制動員である。高村光太郎が、戦時中、「国のために私利を捨てん」と詩を書いたが、こう言わせるために裁判員制度は生まれた。改憲と裁判員制度は繋がっている。改憲、恐慌の時代は、改憲反対、戦争反対の時代だ。「私の拒否をみんなの拒否へ。みんなの拒否は制度の廃止」。高山さんのお話はキレがよく、スキッとしました。

集会参加者の方の発言もとても良かったのですが、割愛させていただきます。心配していた雨も降らず、コールをしながらのデモは力強く、街行く人の関心を集めていました。今後とも、みんなで廃止に向けて頑張りましょう!(宮城県連絡会 立石美穂)

6・23に安保沖縄集会

沖縄戦が終結した日とされる6月23日、文京区民センターで、実行委員会主催の沖縄集会が380名で開かれました。沖縄から労組交流センター・NTT労働者の真喜志康彦さんが参加し、沖縄での闘いについて特別アピール。動労千葉の田中委員長は労働運動の帰すうをかけて開始された6.13国鉄全国運動と沖縄の労働者の基地撤去・安保粉碎の闘いを結びつけて全情勢を切り開こうと訴えました。

基調報告で若い女性労働者は「戦争



をとめる力、安保を粉碎する力は職場での団結した闘いの中にある」と力強く提起。実行委の各団体がアピール、西川重則さんも「日米安保体制は認められない」と発言。若い人たちの参加が多く、デモもすごく活気がありました。